

I リサイクル

いまやリサイクルや分別は、日本ではすっかり定着した。定着とは社会習慣化である。社会習慣化した習慣は、自然と「よき行い」とそうでない行いを区別する。社会習慣はモラルを作りだす。このとき社会習慣の是非が問われることはもはや無く、社会習慣におけるモラルばかりに目が向く。裏返せば、リサイクルや分別を「正しく」するだけで廃棄行為が正当であるという感覚を我々に持たせてくれる。

そしてもう一つ、社会習慣化は相場を生み出す。人々の行動が習慣化し、だんだんと流暢になれば、人や物の流れはシステムティックになり、金銭のやりとりは相場として適当なところに落ち着く。相場を作る社会習慣と、それに左右される物質やその価値評価について。私たちがリサイクルに目を向けた動機はここにあった。

綺麗なアルミ缶は、確立されたリサイクルの過程では意外にも集まらない。リサイクルされるアルミ缶は通常潰して集めるためである。

私たちは、釜ヶ崎地区の人たちへ「綺麗な」アルミ缶集めの仕事を依頼した。通常のアルミ缶集めと異なるこの仕事には、そのアブノーマルさゆえに新たに相場を決める必要があることを私たちは知った。何度か交渉を行った結果、その特殊なアルミ缶集めの相場は定まっていった。やはり相場は、習慣の強弱と関係している。

空き缶の意匠は、社会に溶け込みきっている。私たちがあまりにも馴染みきった意匠である。

私たちは、集まった空き缶を商品パッケージ化されたアルミニウム片として捉え、用いる。そして、そのイメージを部分的に切断して美的なるものへの還元を試みる。善的なるもの、美的なるもの。現代の消費社会は、それぞれの違和感を教えてくれる。

II 噂と迷信

幼少の頃、町中や自然にいる鳥や動物の羽根は菌を持っているので拾わないように躰けられた。この一方で、「免疫をつけるために、子どもを3歳までに動物園へ連れて行くとよい」という噂・迷信も作りだす。

管理された動物園内で免疫を求める姿と、園外の道や池で出くわした羽根を何となく恐れ遠ざける姿。我々は得体の知れなさに対し、いつも都合良く向き合う。それは、我々に日々浴び続ける情報を吟味する猶予や能力がなく、曖昧なまま処理するほかないことを物語っている。親や先生による教育は、ときに自然科学よりも頼れるものとして存在し、我々の習慣として染みこんでいく。

私たちは今回、天王寺動物園に通い続け鳥の羽根を集めた。生え替わり時期に落ちた羽根や、死んでしまった鳥の羽根。ホロホロチョウ・ダチョウ・フラミンゴ・カモ・サギ。そして、その羽根を一枚ずつ除菌し無菌化した。私たちは繰り返し羽根に触れながら、得体の知れなさへ身体的な接近を試みる。

無菌化のプロセスで得体の知れなさが一つ取り除かれた羽根は、一体何を感じさせるだろうか。純粹な美しさか、それとも喪失した意味と現出した存在による魅力のなさか。

Ⅲ 募金

大阪の街中を歩き、幾度と目にした募金ポスターの「赤い羽根共同募金は地域の人々の幸せのために役立てられています」というメッセージ。思い起こせば、募金活動は小学校でも必ず年に一度行われていた記憶がある。

募金者、募金を呼びかける人、そして「地域の人々」。人は、寄付の現場に立った際、参加可否や金額はこれら関係性の強弱が大きく作用するという。寄付の背後で我々が周囲に示している態度の正体は何か。また、我々が想像する「地域の人々」とは一体どのような人なのか。

私たちは、募金の場を作ることにした。募金を呼びかける人がいない状況のもと、赤い羽根共同募金の募金箱を enoco の入口にただ設置した。2ヶ月間の募金額は僅かだった。私たちは手元に残った赤い羽根を自ら募金を行い、手に入れた。

そもそも日本では、赤い羽根は社会奉仕のしるしとして一枚だけ手渡される。そしてそれを衣服に身につける習慣がある。装着された赤い羽根は自ずと象徴になる。

だが、いつだってそうだが、象徴は意味を変える。たとえば為政者の意図によって、たとえば不特定多数が作り出す空気感によって。赤い羽根は一人歩きができる。

記号化した赤い羽根が、染料で赤くした単なる羽根として振る舞われるとき、その羽根は物質として我々の認識に揺さぶりをかける。